

「突然の死別経験者のPosttraumatic Growthに関する臨床心理学的研究」

－ 苦悩と精神性的変容に着目して －

榎 田 翼

I 問題と目的

1. PTGについて

外傷後成長 (Posttraumatic Growth ; 以下, PTGと称す) とは, 外傷的な体験, そしてそれに引き続く苦しみの中から, 心理的な成長が体験されることを示している (Tedeschi&Calhoun, 2004)。PTGの生起には, 衝撃度の高い出来事がきっかけとなる。また, 何らかの心理的もがきがあってこそ生起しえる (宅, 2010) という。

2. 苦悩について

フランクフル (1998) は, 危機に直面した人が苦しみを超えて, 苦悩である「問い」を見出すことが重要であるとしている。それは「苦悩する能力」を持った人間にのみ可能なことであり, 苦しみを取り除き, それを奪ってはならないとしている。開 (2006) によると「精神性的変容」は, 苦悩にもがくなかで, あらゆる努力の限界に直面した時に生じるとされている。

3. 精神性的変容

PTGには, 5 因子があり, 「精神性的変容」と呼ばれる領域があり「宗教的信念がより強くなった」, 「精神性 (魂) や, 神秘的な事柄についての理解が深まった」の2項目からなる。リーブリッヒ (2015) は, PTGの「精神性的変容」を, 「人生哲学の変化」と表現し, たとえば, 人生の優先順位の変変化, 人間性に対する信念や宗教・精神的信念の変化等であるとしている。また, 悲劇的な災害のあと, インタビュー臨床のセッションで, うまくいったものは, 多くの場合, トラウマ経験者の物語によく現れ, 「精神性的変容」に対応するメッセージの強化として, 「災害は私の人生に新しい道を開いただろうか。人生哲学・価値の仕組み・宗教・スピリチュアリティに関する結論など」と示している。このように, 精神性的変容は, 多くを含意した多義的な成長である。開 (2009) は「日本人にはトラウマ後のスピリチュアル変容が縁遠い印象が伺える」と述べているが, 精神性的変容は, 必ずしもキリスト教信者に限ら

れず, それ以外の者にも, 何らかの形で体験され得るとしている (宅, 2010)。

4. 目的

本研究では, 突然の死別に焦点を当てる。突然の死別経験者は長期闘病の末に亡くなった場合よりも死を受け入れにくくなる傾向にある (富田, 瀬戸, 鏡, 上里, 2000)。また, キューブラーロス (2007) によると, 突然の死別を経験した故人の「否認」の段階は長く, 深いものになることを説明している。

これらのことから突然の死別は, 様々な死別経験の中でも, より強烈な衝撃だと思われる。Tedeschiらは, その出来事が痛ましく, 解決困難であるほど成長が生じる (Tedeschi, R.G., & Calhoun, L.G. 1995) と述べている。

突然の死別経験者が, 経験したPTGから, 特に「苦悩」と「精神性的変容」に着目し, その作用はどのようなものであるかを考察することを目的とする。

II 方法

研究協力者と調査方法: 突然の死別を経験した3名 (宗教に属さないA, キリスト教徒のB, 仏教徒のC) に現象学的アプローチによるインタビューを行った。

分析方法: 現象学的分析。叙述から得られたデータについて, 本学大学院修士課程2年2名, 指導教員, 筆者の合計4名で合評した。

III 結果と考察

A, B, Cの叙述を『イタリック体』とする

1. 娘を殺害によって喪ったAの精神性的変容とそれに付随するPTG

Aは, 娘との死別後, 『神様』に『選ばれた』娘の死を『越えて』『生きてやろう』という活力を得た。また, 家族の結束, 以前に宗教から学んだ『何があっても感謝』という死別以前の考え方への『やっぱり』という『納得』を得た。また, 生前以上の娘の『魂』との繋がりを得た。

2. 婚約者を自殺によって喪ったBの精神性的変容

とそれに付随するPTG

Bは、死別後、『聖書のことろがすごく深くわかる』ようになり、『人には考えの及ばない神様のご配慮』があることを悟り、神が人を『最終的に』『人の幸せ』に導くと思うようになった。それに付随して、『人に対する思い』が変わり、『自分も強くなれた』。その概要として、人を『ちゃんと見て』救う方法を客観視できるようになった。そしてその責任を果たす『覚悟』ができた。また、人との『繋げる関係性』を大事にしようと思った。また、自分の死を『受け入れられる』という確信を得たと同時に、『自分は、自殺をしない』、そして、人にもさせないように『熱心』に『助けられる』。

3. 息子を事故によって喪ったCの精神性的変容とそれに付随するPTG

Cは、息子との死別後、①『嘆き切ってきたことで』人の嘆きを『いい』とか『悪い』じゃなく『そのまま聞ける』ようになった。②教会で、Cの言うことを理解してもらえるようになった(言葉の説得力を増した)。この①②を、『形を変え』た息子とし、『私の中で生きてる』とした。また、苦悩の最中にある人が、今はわからなくても、『その人なりの、その生きる喜びを』『どこかで必ずつかむ』ことを知る。また、宗教の教えへの確信を得る。確信を得ると『体が動く』、『行動』になる。

4. 苦悩について

Aにおいては今回のインタビューから苦悩に対する叙述を得ることはできなかった。

Bは、彼女の自殺について『僕が殺してしまった』『罪』という『20年間』続いた他人には理解できない苦悩(神様を否定できないことによる宗教性による苦悩)を抱いた。Bの『プライドが高い』ことが、その苦悩につながるが、この苦悩により、人を『ちゃんと見て』救う方法を客観視できるようになり、そしてその責任を果たす『覚悟』ができたことにつながっていることが示唆された。Cは、お役を引いたことと息子の死の因果性を見出ししてしまうことによる自責、また、そのように見たり、言う人がいることによる教会への不信感、『特別な息子』の死に対する『神様』へのわだかまりという苦悩を抱いたが、それらを含めて、『嘆き切ってきた』ことが、Cの得た精神性的変

容全てに繋がっていることが示唆された。

5. PTGに作用したもの

3名の叙述から、【神への信仰と前提とされる死後の世界】、【死別経験を通しての宗教的思考の確信や納得】の構造に到達した。前者は、それぞれ故人に対する死への意味づけを肯定的に捉える素因となり、PTGに至るための意図的思考(宅, 2010)に寄与していることが示唆された。後者は、それ自体が精神性的変容であり、また、それが、他のPTGを強める要因となっていることが示唆された。

6. 総括と臨床心理学的意義

本研究によって、精神性的変容は、PTGの別因子に作用したり、その起点となることが示唆された。さらに、苦悩が精神性的変容を含むPTG全体に作用することが示唆された。PTGの「精神性的変容」が他のPTG因子へ作用する機能が明らかにされたことによって、「精神性的変容」の重要性が示唆された。「精神性的変容」は、キリスト教信者以外にも体験され得るという説明(宅, 2010)は、キリスト教信者以外の方々の豊富な「精神性的変容」の生起が明らかにされたことによって支持される結果となった。苦悩の最中にある人の「精神性的変容」の可能性を知っておくことは、大きな衝撃に遭い、苦しむ人々の支援のあり方の深化にもつながるのではないだろうか。

【引用文献】

- Calhoun, L. G., & Tedeschi, R. G. (2004). The Foundation of posttraumatic growth: New considerations. *Psychological Inquiry*, 15, 93-102
- 宅香菜子(2010): 外傷後成長に関する研究: ストレス体験をきっかけとした青年の変容, 風間書房
- フランクフル, ヴィクトール, (1998): 『苦悩の存在論』, (訳) 真行寺, 新泉社
- 開浩一(2006): Posttraumatic Growth(外傷後成長)を促すものは何か: 変容過程に視点を置いて, 長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要 4(1), 75-84
- リーブリッヒ・アミア(2015): 心的外傷後成長(PTG)研究におけるナラティブ・アプローチ: (訳) いたけひこ, 山崎和佳子, 東西南北: 和光大学総合文化研究所年報 88-103, 2015, 和光大学総合文化研究所
- 開浩一(2009): 危機からのスピリチュアリティの覚醒とポジティブな変容 地域総研紀要7(1)35-40, pp.37
- 富田拓郎・瀬戸正弘・鏡直子・上里一郎(2000): 資料 死別体験後の悲嘆反応と対処行動一探索的検討一, カウンセリング研究33(1)48-56
- エリザベス・キューブラー・ロス, デーヴィッド・ケスラ(2007): 永遠の別れ 悲しみを癒す智慧の書, 日本教文社
- Tedeschi, R.G., & Calhoun, L.G. (1995): Trauma and transformation: Growing in the aftermath suffering. Thousand Oaks: Sage